

[封印],[ラッパ],[鉢]の相互関係に関する考察ー3ラッパと鉢は同時期

「封印」「ラッパ」「鉢」の記述は伝統的な解釈として最後の封印で7つのラッパが吹かれ、最後でのラッパで7つの鉢が注がれるという「入れ子構造」になっていると言われていますが、先ず「封印」は予告編であることを確認しました。

「封印」と「ラッパ」の関連については、はっきりと聖句で述べられています。(啓示 8:1-2)
「第七の封印を開いた時、…そしてわたしは、神の前に立つ七人のみ使いを見た。そして、七つのラッパが彼らに与えられた」

ラッパが封印のゆえに生じる、そこから出て来たことは明らかです。しかし、「ラッパ」と「鉢」についてはそれと同様な関連についての記述などは一切存在しません。これは「封印」の全部が解かれて、事の全容を明かしたので、次はいよいよ本番という流れとして記されているのでしょう。

むしろ、「ラッパ」と「鉢」は同時期に起きる事柄の、別の観点からの記述に違いないということを先に少し触れました。ここではそれを詳しく論じてゆきたいと思います。

第7番目のラッパについてですが、その直前に次の声が上がります。

(啓示 11:14)「第二の災いが過ぎた。見よ、第三の災いが速やかに来る。」

それで、第7ラッパが吹かれると、すぐ災いかと思いきや、(啓示 11:15)「大きな声が天で起きてこう言った。「世の王国はわたしたちの主とそのキリストの王国となった。

となっており、これが災いの表現とは思えません。それまでの災いに見られた具体的な『死』『苦難』『打撃』『衝撃』『破壊』などの表現がありません。

さらに後を見てゆくと「あなたご自身の憤りも到来」「…破滅に至らせる定められた時が到来した」という表現がありますが、これは、これから後それが具体的に行われる時節が到来したわけで、災い自体はここで起きてはいません。

それで速やかに来る「第三の災い」と思えるのはその次の記述です。

(啓示 11:19)「稲妻と声と雷と地震と大きな雹が生じた。」これは明らかにこの時に「生じて」おり、他のラッパの記述と通ずるものです。これが「第三の」つまり第七のラッパによって生じる災いであれば、その後の記述は、7つのラッパのうちに含まれるものではなく、また別のものであるとしなければなりません。

逆に「7つの鉢」が第三の災いであるとするなら、「第七のラッパが吹かれた」という記述のすぐ後に出て来るこの「稲妻と声と雷と地震と大きな雹が生じた。」をまったく無視しなければなりません。

まずこの事だけでも、「入れ子構造論」は崩れます。

さて、では「7つの鉢」が「第3の災い」ではないということを裏付ける根拠があるのでしょうか。あります。

「ラッパ」の「災い」 οὐαὶ [ウーアイ]

ギリシャ語の本来の意味：災害、残念、不幸、気の毒に思う

用例：（大バビロンが滅んだ後で、王や旅商人たちの言葉）「気の毒だ、気の毒なことだ…」（サタンが落ちた後、地にとっては）「災いだ」

「鉢」の「災厄」 πληγὰς [プレガス]

ギリシャ語の本来の意味：傷害 殴打、傷 災厄

用例：「殴打」（ルカ10：30，使徒36：22）むち跡（使徒16：33）
「打ち傷」（啓示13：3，12）「災厄」（啓示18：4，18）

まとめますと、そのニュアンスの違いは大きいと言えます。

ウーアイ 天災（受ける災い、自然災害、災難、[加害者ではなく被害者の観点からの表現といえると思います]）

プレガス 天罰（与える災い、意図的に傷を負わせる。滅ぼす）

ここで、「ラッパ」シリーズに度々登場する「災い」という語と、「鉢」シリーズで使われている「災厄」との違いについて、明らかにしておきましょう。

「ラッパ」と「鉢」の決定的な違いは、ラッパは「災いが起きることを告げる合図」と、その後のその実行であり、一方、鉢は、神の怒りを満たしたものが注がれることであり、どちらも神からもたらされる、あるいは許されることにより生じる出来事ですが、言わば、「天災」と「天罰」の違いがあります。「災い」（ウーアイ）と「災厄」（プレガス）と言葉を使い分けていることを無視せずに受け止めると、その違いに意味があることが見えてきます。

「鉢の災厄」（プレガス）を神の民（是認された人）が被ることはありません。しかし彼らも、三時半の期間、獣の手に渡され「災い」（ウーアイ）を被るのです。

言い換えれば「災い」に会わない人は、「災い」を引き起こしている側の人間だけで、

その他の人類は皆「災い」に会うのです。つまり神の民も例外ではないということです。あるいは又この「災い」は龍が天から落とされた時に出された「地に住む者には災いだ」という叫びにあるように、誰であれ「地に住んでいるものは、災いに遭うということです。聖徒たちの信仰と忍耐を意味するというのはこのことです。そしてその災いは場合によっては殉教ということもあり得ることが示されています。まったく「災い」です。第3の「災い」は「鉢」を指しているのではないという理由はこれです。

つまり「鉢」は「災い」ではないということです。

神からの裁きを「とんだ災難だ」と理解、表現するのは、神の意に反するでしょう。

そうした認識を示すのは、神を恐れぬ「地の王たち」や「旅商人」の内に見られます。

(啓示 18:8)「彼女の災厄（ギ語：フレゲー）は一日のうちに来る。それは死と嘆きと飢きんであって、彼女は火で焼き尽くされるであろう。」

(啓示 18:10)「気の毒だ（ギ語：ウーアイ）、気の毒なことだ、大いなる都市よ…」

さて「鉢」が最後の「ラッパ」によって生じる直接の出来事でないとする、改めて、「ラッパ」と「鉢」がどういうタイミングで起きるのかを考察する必要があります。

「ラッパ」と「鉢」が同時期に起きると考えられる先ず最初の根拠としてあげられるのは、この11：19と同内容の記述です。これらの共通した表現は「封印」「ラッパ」「鉢」の最後に見いだされます。

第7封印時「雷が生じ、声と稲妻と地震が起こった。そして、七つのラッパを持つ七人のみ使いがそれを吹く準備をした。」(啓示 8:5 - 6)

第7ラッパ時「稲妻と声と雷と地震と大きな雹が生じた。」(啓示 11:19)

第7鉢時「稲妻と声と雷が生じ…大地震が起きた。…重さが一タラントほどもある大きな雹が天から人々の上に降り」(啓示 16:18 - 21)

この7番目の「鉢」の詳しい記述から見ると、この稲妻、大地震、雹などの災厄は「大バビロン」の滅びを描いていることが分かります。

「第七の天使が、その鉢の中身を空中に注ぐと、神殿の玉座から大声が聞こえ、「事は成就した」と言った。そして、稲妻、さまざまな音、雷が起こり、また、大きな地震が起きた。それは、人間が地上に現れて以来、いまだかつてなかったほどの大地震であった。

あの大きな都が三つに引き裂かれ、諸国の民の方々の町が倒れた。
神は大バビロンを思い出して、御自分の激しい怒りのぶどう酒の杯をこれにお与えになった。」(黙示録 16:17-19 新共同訳)

「また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。(新改訳)

そして聖句は続く 17 章で、この「大バビロン」の滅びを改めて詳細に描いています。

それで、「封印」「ラッパ」「鉢」はどれも最後に、「大バビロンの滅び」を記して終わっているとと言えます。そして、これが、「ラッパ」と「鉢」が同時に生じるとする根拠の一つです。

さらに、それぞれによって成し遂げられる事についてこう記されています。

「ラッパ」によって成し遂げられる事

「もはや猶予はない。第七のみ使いが吹き鳴らす日、彼がラッパを吹こうとするその時に、神が預言者なるご自分の奴隷たちに宣明された良いたよりに基づく神の神聖な奥義は、確かに終わりに至る」。(啓示 10:6 - 7)

「鉢」によって成し遂げられる事

七つの災厄を携えた七人のみ使いがいた。これは最後の者たちである。彼らによって神の怒りは終わりに至るからである。* (啓示 15:1)

これらを踏まえて、改めて福音書の「終わりの日のしるし」について語られたところを思い起こしますと、イエスは、「災い」と臨在のしるししか語っておらず、最終部分で「選ばれた者たちに祝福が与えられる(王国を受け継ぐ)ことと、不忠実な追随者の裁き」がなされてすべてが「終わる」とされています。神の裁きについては何も述べておられません。つまり、「封印」と「ラッパ」の部分と同様の内容を語っておられ、福音書とこれらは、きっちり、合致します。つまり「災い」の後に一連の「災厄」が続くのではなく、「災い」自体が裁きなのです。

* この訳だとみ使いが最後の者という意味になっていますが、ギリシャ語本文の語順では、「最後」は「災厄」にかかっています。ですから、他のほとんどの翻訳は次に引用する「新改訳」と同様の訳し方をしています。
「七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。」

第5のラッパは「天から地に落ちた星」から始まります。これは底知れぬ深みの使いでアバドンで、アポロンという名がある事から、この落ちた星はサタンで、ミカエルによって天から落とされた時から始まります。前半の3時半の開始です。



第5

大きな炉の煙のような煙がその坑から立ち上り、その坑の煙によって太陽が、また空気が暗くなった。いなごには、彼らを殺すことではなく、彼らを五か月のあいだ責め苦しに遭わせることが許された。彼らに加えられるその責め苦しは、さそりが人を襲うときの責め苦しのようであった
(啓示 9:2-5)

すると、その王国は暗くなり、彼らは苦痛のあまり自分の舌をかみはじめた。しかし、その苦痛とかいようなために天の神を冒とくし、自分の業を悔い改めなかった。(啓示 16:10,11)

共通キーワードは 「苦痛」と「暗黒」

第6

「大川ユーフラテスのところにつながれている四人のみ使いをほどこきなさい」

これら三つの災厄によって人々の三分之一が殺された。その口から出た火と煙と硫黄のためである。(啓示 9:14,18)

大川ユーフラテスの上に注ぎ出した。すると、その水はかれてしまった。

三つの汚れた霊が、龍の口から、野獣の口から、偽預言者の口から出るのを見た。それらは実は悪霊の霊であってしるしを行ない、全地の王たちのもとに出て行く。(啓示 16:12 - 14)

共通キーワードは 「ユーフラテス」と「三つの災厄」

「ユーフラテス」は「大バビロン」の倒壊(滅びの前兆)の象徴
「三つの災厄は、龍、野獣、偽預言者であり、火と硫黄と煙は永遠の裁きと滅びの象徴

4人のみ使いが解かれた結果出現するのが「不法の人」であり、後半の3時半が開始する。

「野獣とその像を崇拝して、自分の額または手に印を受ける者は、憤りの杯に薄めずに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、火と硫黄による責め苦しに遭わされるであろう。そして、彼らの責め苦しの煙は限りなく永久に上り…(啓示 14:9 - 11)

第7

稲妻と声と雷と地震と大きな雹が生じた。(啓示 11:19)

稲妻と声と雷が生じ、大地震が起きた。非そして、大いなる都市は三つの部分に裂け、諸国民の数々の都市が倒れた。(啓示 16:18 - 19)

「大バビロン」の滅び